2022年3月20日 川越教会

丸山　勉

友なるイエスよ！

［マルコによる福音書14章32～42節]

一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」

少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

[１]　「いつくしみ深き」のキーワードは「友」

「讃美歌」の中で一番知られているNo1の讃美歌は、クリスマスの「きよしこのよる」などを除けば、「いつくしみ深き友なるイエス」ではないかと思います。メロディも良く知られていますし、キリスト教式の結婚式場でも歌われることが多いと思います。今日もこのあとで皆で歌いたいと思いますが、これはつくづく信仰の歌だと思います。イエス様への信頼があって初めてこの歌が自分の歌として心の中に深く響いてくるのではないかと思います。

この歌のキーワードは、英語の元歌詞もそうなっていますけれども、「友なるイエス」の「友」（Friend）だと思います。イエス様が私の友だちになって下さる、いや、なって下さったのだという「近さ」がここにはあります。けれども考えてみると、イエス様は、神ご自身と言っても良い存在ですから、「友だち」などと言うのはおそれ多いというか、失礼なんじゃないかとさえ思ってしまうことがあっても不思議ではありません。しかし、そのことこそ今日改めて教えられているところだと思うのです。どういうことかと言うと、私たちがイエス様のことを「友」と言う前に、なぜそのように言えるのかというと、まずイエス様が私たちのことを「友」と呼んで下さったという事実があると言うことです。今日の礼拝の招きの聖句は、実はイエス・キリストの遺言集とも言えるヨハネ福音書の14章から17章までの中からの主の言葉の一つです。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15:13）。そしてイエス様は、「あなたがたはわたしの友である」(15:14)と語られているのです。

「友」というのはどういう人のことを言うのでしょうか？色々言えると思いますが、私は、それは“秘密を共有している人”だと思います。公には言えないことも、この人にだったら言えるという人。その人の前だったら思いっきり笑える人、またはばからずに泣ける人。それが「友」ではないかと思います。それはなかなか難しいことだと思うのです。身近な人でも…。けれども、イエス様が「友」になって下さるというのは、本当に私の秘密を理解して下さり、また一緒に涙して下さる人。それがイエス・キリストというお方なのだと思います。

[２] 「わたしは死ぬばかりに悲しい」

今日の聖書箇所では、ある意味、逆転現象が起こっています。イエス様が「わたしのそばで目を覚まして祈っていてほしい」と、友を求めているのです。時は、十字架にお架かりになる前夜、オリーブ山の麓のゲツセマネという園です。ある人は、これは異常な夜だと言います。たとえばそれはもう死刑が決まっている、その前夜の死刑囚の心理はどうだろうかと。しかも、全く罪を犯していない者が、晒し者になって残酷な仕打ちで死んでいく、それを決定づけられる夜です。そして主イエスは、そのことこそ、自らが地上に遣わされた意味、飲むべき杯（御心）であることを知っていました。それは全く美味しい杯ではありません。

33節で「そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れて悶え始めた」とあります。ある意味、弱く、動揺されるイエス様、父なる神に対しても、「アッバ、父よ、あなたは何でもお出来になります。この杯をわたしから取り除けて下さい」と格闘するように祈られました。この運命はわたしには担い切れませんと、泣くような思いを持って祈られたのだと思います。私たちにはこの時のイエス様の心を本当には分かりません。その父なる神とのやりとりの重さは計り知れません。これは父なる神とイエス様との深い取り引き、「秘儀」だと思います。しかし後に、使徒パウロはこう語りました。「罪と何のかかわりのない方を神は罪となさいました。わたしたちはその方によって、神の義を得ることが出来たのです」（コリント二5:21）。―私たちのために、主イエスは世の「罪」を全部飲み干し、罪そのものになって下さったというのです。それが、ゲツセマネの祈りの後半で決定的になりました。祈りの格闘の末、「しかしわたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」。イエス様は、苦しみ抜かれて、この道を選び取りました。

しかも、この大変な場所に、イエス様は弟子たち、「友」を招いたのですね。イエス様は独りにはならなかった。これ迄お独りの時も度々あったのになぜでしょうか。それを思う時に、今日の箇所で一つ私の中にひっかかる言葉がありました。それは34節の「わたしは死ぬばかりに悲しい」という言葉です。これはご自分の「苦しみ」をそのように言い換えたということかも知れませんが、「苦しい」ではなく、「悲しい」という表現をイエス様はなさっているのですね。少し調べてみたら、聖書ではイエス様が「悲しい」と自己表現されている所は稀のようです。しかも「わたしは死ぬばかりに悲しい」と。ちょっと考えてみました。「苦しい」とか「辛い」というのはどういう時に言うか、自分自身の受けている仕打ちや試練を耐えている時です。忍耐です。一方「悲しい」とはどういう時に使うか。例えば災害や戦争です。他者の命が失われていくのを見ると「悲しい」「やるせない」と思う。私たちの「悲しみ」の一番大きな要因は喪失・別離ではないでしょうか。上智大学グリーフケア研究所名誉所長であるシスター高木慶子（よしこ）さんは仰います。「大切な人の死だけでなく、失恋、両親の離婚、信じていた人の裏切り、会社の倒産、損なってしまった健康――大げさでなく、人生の三分の一はグリーフと共にあると私は考えています。だからこそ言えるのです。人間は、悲しんでいいと。」（NHK出版新書『悲しんでいい』―大災害とグリーフケア―より）

イエス様はわざわざ弟子の内の三人（この3人はある意味問題児でもあったと思います）を、自分の近くにいるように招きました。これは文字通り「最後の夜」でした。別離は近いのです。もちろんイエス様は弟子たちに、眠らずに支えて貰いたかったということもあったと思います。「目を覚まして祈っていなさい」と命じてもいます。しかしそれだけでなく、これは私の今の捉え方でしかありませんが、弟子たちのこと、そしてそれに続く私たち人間の喪失のことを心に思う時に、「死ぬほどの悲しみ」を覚えられたのではないでしょうか。この悲しみは、弟子たち、そして私たちを失いたくない！という強い愛の裏返しだと思うのです。祈りの初めはご自分のことを祈られました。「この杯を取り除けて下さい」。しかし主は、私たちへの愛ゆえに、「しかしわたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように…」と祈られたのです。そして、その御心を主は受け取られました。

 バッハの『マタイ受難曲』という素晴らしい楽曲がありますが、その中で、ソプラノのアリアでこのような美しい歌が歌われる所があります（第49曲）。

「愛ゆえに私の救い主は死のうとしておられます。罪ひとつ知らない御方なのに。永遠の破滅と　裁きの刑罰が　私の魂に覆いかぶさらないようにと。」

[３] 同じ神の国の秘密を知っている「友」として

　ゲツセマネの園は闇に覆われていました。私たちの中にも、「闇」がありますよね。そして私たちは、弟子たちと同じように、闇に覆われて祈り続ける力がないのです。残念ですがそれが私たち人間です。けれども、主イエス様は、そのように自分の罪にも鈍感で眠りこけてしまう私たちのためにも、独り闇の中で祈っていて下さるのです。苦しみながら、悲しみながら。このあと、ユダがイエスを捕らえるために祭司長や民の長老たちを引き連れてやってきました。その時、マタイ福音書では、イエス様はユダに「友よ、しようとしていることをするがよい」（26:50）と言っています。「友よ」です！三人の弟子たちだけでなく、ユダも、全ての弟子たちも、つまり、イエスを裏切ったり、捨ててしまった者たちも「友」なのです。「神の友」なのです。イエス様が十字架におかかりになったということは、私たちがもはや神様のもとから離れることがないためだと思います。ここに地上を超えた「神の国」が実現している、わが愛のうちにとどまれ、あなたと私は、同じ神の国の秘密を知っている友なのだからと、御腕を拡げておられるのです。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15:13）。

お祈りしましょう。そして讃美歌「いつくしみ深き友なるイエス」を、自分の告白の歌として心を込めて歌いましょう。

主イエス・キリストの父なる神様、私たちは信仰を与えられていながら、何と自らの罪に鈍感なのでしょう。すぐに心が闇に覆われてしまい、あなたが見えなくなってしまいます。しかし、そのようにあなたを見失い、彷徨い、逃げてしまう私たちのことをあなたは悲しみ、嘆き、愛して下さるお方であることを感謝致します。私たちは、あなたの友である！神様の友である。こんなに幸いなことはありません。そうであれば孤独ではありません。私たちもまた祈り合う共同体を作ってゆくことが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。